沙河村の普通選挙

孫　戰　科

夜がおとずれた。沙河村（山東省歷城県）はしんと靜まりかえつている。一日の野良仕事に精を出した農民たちはもう寢てしまつているのだ。ただ路啓鳳さんの家だけにまだ明かりがついている。こんなことはしよつちゆうあることではない。早寢と早起が農民の慣わしだ。路啓鳳さんがこうして夜ふけまでおきているには、何かわけがあるにちがいない。

路啓鳳さんの家がおそくまで明かりをつけているのは何も今夜にかぎつたことではなかつた。五月にはいつて、普通選挙の準備がはじまつてからは、ずうつといつものきまつた時間に寢床にはいれなくなつているのだ。選挙民の組長の一人にえらばれた路啓鳳さんには、人口調査表の書きいれとか選挙民の登記などいろんな仕事がふえている。村の活動分子も路啓鳳さんが指導している選挙民組の組員たちもしよつちゆう彼の家にあつまつてくる。彼らはどんなふうに選挙委員会をつくるか、どんなふうに選挙民の資格を審査するかといつたようなことを話し合うのだ。

今日も路啓鳳さんのところでは、夜中まで話がはずんでいる。みんなは会議の準備について話している。会議というのは村人民代表大会に出す代表の候補者選出について討議する会議だ。

会議はあくる日の夜、路啓鳳さんとこの庭でひらかれた。最初に候補者にあげられたのは村長で共産党員の路守泉さんだつた。彼を指名したのは、みんなの尊敬を受けている九十二歳の李傳貞爺さんだつた。えらんだ理由をよく納得してもらうために爺さんは、村長の仕事ぶりや暮らしむきについてくわしく話した。そして國民党反動派が支配していたころ、彼がどんなに貧乏のために苦しんだかということや、土地改革のときにすすんで農民を指導し地主と闘つたことなどについて話した。さいごに爺さんはこう言つた。

『路守泉は腹のそこから信用できる男じゃ。この男をえらべばまちがいはない』

つづいて路啓鳳のおかみさんの卜秀英が発言した。

『わたしたちの村長さんは人手のたらない家のことをほんとによく心配してくださる。村長さんは種蒔きはもうすんだかとか、何か困ることはないかといつも私たちのところへきて聞いてくださるんです。私たちは村長さんからいろいろ助けてもらつています』

路啓鳳のおかみさんのつぎに発言したのは、庭の隅つこにおとなしくあぐらをかいている路廣漢さんだつた。

『これ以上言う必要もあるまいが……』彼はせかせかした調子で話しはじめた。

『わしたちの村長はまつたくよく出來た人じゃ。わしのことについて少ししやべらしてもらうが、村長の話をきいてから、わしはすぐ新しいやり方で綿のメイガ退治をやつたが、いつもより三百斤の豐作じやつた。村長はへりくだつた人で、地位を鼻にかけたことは一度もない。去年、村長はよくわしの畑にきて、わしの種蒔きに気をくばつてくれた。今年もわしの家の新築の相談にのつてくれた』

村長のことでは、大勢のものが発言したがつた。議長の路啓鳳は議事を進行させるのにすいぶん骨がおれた。

路守泉村長を候補者に立てることは満場一致できまつた。つづいて会議は、劉傳宴という人の候補資格の討議にはいつた。

はじめに立つたのは『はげちやん』とよばれている若者だつた。

『あんなもの代表になれるもんか！』と彼はあらあらしく言つた。

『あの男はおくれた人間で迷信かつぎだ。封建思想ものこつている。何かといえばすぐ神様をかつぎだす。ひでりや水害にみまわれでもしたら、おみきをあげてお祈りするにちがいないんだ』

はげちやんは、劉傳宴についてみんなが思つていることをずばりと言つてのけた。誰ひとり彼を候補者にえらぼうとするものはいなかつた。

つぎの候補者として若いおかみさんの朱元芳の名前が出たとき、あぐらをかいてはじめからずつとだまりこくつていた劉青泰爺さんが突然『フン』と鼻をならした。

『わしらはいま代表をえらんどるはずじゃ。まさか女が代表になれるわけはあるまいて』

爺さんが言つたことはとりわけ婦人たちの憤慨の的になつた。みんなわいわいさわぎだし、一しよになつて爺さんをやつつけた。

『お前さんの考えはなんという時世おくれだよ！　女のなかにもお前さんのような人は一人もいやしないよ』

『お前さんはほんとに頑固爺だよ。あ

たまば封建思想のかすだらけで』

『よくよく反省してもらわんことにゃ！』

議長の路啓鳳は婦人たちをしずまらせてから、劉青泰爺さんにいつた。

『お前さんがわるいだ！　毛主席は、男女平等をおしえておられる。女も男と同じように選挙権ももつておれば被選挙権ももつている。みんなも知つてのとおり、ここ何年というもの、女が男からとりのこされるちうようなことも一度だつてありやしなかつた。お前さんの反対する朱元芳さんをよくみてくんろ。まだ二十歳そこそこじやが、仕事はできるし学習のほうも模範者じゃ。おまけに互助組の指導までやつちよる。あの女のどこがわれわれ男にかなわんというのかね？』

彼は婦人たちにむかつてつぎのようにつけくわえていつた。

『会で自分の意見をのべる権利は誰にでもある。けんど劉青泰爺さんが口をすべらせただけでおこつたりするもんじゃねえ』

朱元芳さんは大多数の賛成で候補にとおつた。会場は靜かになつた。だがそれも長いことではなかつた。李德成という人の候補資格のことで、またもや議論がふつとうしたからだ。李德成の名は路啓鳳がもち出した。だが路啓鳳支持されたのおかみさんは座席にとびあがつて、きつぱり言つてのけた。

『李德成さんを候補者にたてることにゃ反対です！　あの人は何年も副村長をしている。だけどいつたい何をしてきたというんです？　官僚風をふかせたり、人に命令をおしつけてきただけじゃないか。去年化学肥料をひろめたとき、誰も使い方がわからなかつたので、買うのをひかえた。ところが、李德成さんは化学肥料のどこがよいかは説明しないで、「すきでも、きらいでも、買わなきゃならん」と命令するだけです。わたしはあの人のこんなやり方が気にくわない。御本人にもそれとはつきり言つてやつたくらいです。ところがあの人の答えはどうでしよう。「これはわしの生まれつきだ」というんです。みなさん、よく考えてください！　あの人はこんな生まれつきなんです。これでも人民の公僕といえるでしようか？』

卜秀英の発言は張淑華という婦人から支持された。張淑華さんはいままで議論のなかにまきこまれないで、おとなしく坐つていたのだが、これ以上だまつていられなくなり、李德成の指名反対の発言をしようと決心した。

『去年、わたしの母の村では、みんなで水路をほりました。村もそのために豐作でした。そこでわたしもわたしたちの村の小川をつかえたら、どれほど畑に水がひけ、どれくらい作物がふえるか考えてみました。わたしはすぐ德成さんとこへいつてこの意見を出しました。あの人は、よいともわるいともいわず、いきなりわたしの前に手をつきだして、「よこせ！」というんです。なんのことかと聞けば、「金だ！」です。これじゃ話してもなんにもならんとわかつたので、わたしばおこつてさつさと出てゆきました。あとでわたしは守泉さんにあいにゆきましたが、この人はまたなんと立派な村長さんでしよう。わたしの出した意見に感謝してくださつたのです。この人が区の方へかけあうと貸付金がおりてきて、わたしたちは早速水路をつくつたんです』

はげちやんは李德成をうらんでいた。いつか誰かと喧嘩したとき、李德成が彼を監禁したことがあつた。彼はそれを今おもいだして、さわぎたてた。

『あの男はおれをぶちこみやがつた！　こんどこそあんな人民の大將にはやめてもらつて、のんびり暮らしてもらうことにするからな』

『なにをいうのだれ、この子は！』と石瑞華という婦人が彼をさえぎつた。『喧嘩してぶちこまれるのはあたりまえじゃないか？　はげちやん、おまえはほんとに悪い心をもつて李德成さんをやつつけている。おまえさんまだおぼえておいでだろう、誰がわたしたちの土地改革をたすけてくれたか？　地主をやつつけたとき誰がわたしたちをひつばつてくれたか？

それは李德成さんじゃないかね？　わたしたちは地主の仕返しをおそれた。すると李德成さんは地主の土地を分けるのに何もこわがることはあるまいとわたしたちをはげましてくれた。貧乏人が明日の米にもこまつたときには、いつもあの人は自分で倹約してためた米をだして

野良仕事で休みの候補者たちの談相